

紹介

小葉田淳教授退官記念国史論集

アメリカ帝国の興隆

小葉田淳教授退官記念事業会編

小葉田淳教授退官記念 国史論集

京都大学名誉教授小葉田淳博士の京都大学文学部定年退官を記念した論文集が、『小葉田淳教授退官記念国史論集』なる大冊にまとめられて、昨年一月に上梓された。小葉田博士は、明治三八年福井県坂井郡丸岡町に生まれ、昭和三年京都帝国大学文学部史学科を卒業、昭和五年台北帝国大学文学部史学科として赴任され、同年助教教授に昇任されて、敗戦にいたられた。敗戦によって研究と生活は大きく断絶されて昭和二年末本土に引揚げられた。その後昭和二年東京文理科大学文学部教授に就任、昭和四年京都大学文学部教授に転任（東京文理科大学教授は昭和二八年閉学まで併

任、退官にいたられた。

小葉田博士の学問的業績は、もとより多方面にわたるが、もっとも顕著な業績は主著『日本貨幣流通史』『中世日支通交貿易史の研究』『中世南島通交貿易史の研究』『日本鉱山史の研究』等に代表されるように、貨幣およびその原材料である金銀銅の生産と流通の問題を一貫して追求されたことであり、昭和四四年には学士院賞も受けられた。また、前後四〇年にわたる在職中、小葉田博士は数百名に達する受業生を指導され、温厚篤実な人柄と研究ひとすじに打ちこまれた真摯なる研究態度をつうじて、多数の後進者を育てられた。今後ますますご健進に、末永く後進を指導くださるよう念願する次第である。

本書の収載論文は、小葉田博士の最終講義講案と受業生および関係者有志による畝呈論文であるが、何分とも多数にわたるもので、以下タイトルのみを紹介する。

十六、七世紀における極東の銀の流通
小葉田 淳
本邦史前の帛状耳飾に就いて 梅原 末治
任那諸国の地理的条件 井上 秀雄
百済の役と民衆 八木 充

いわゆる、中大兄献上の「入部」について
門脇 禎二

難波—大和古道略考 岸 俊男

神話における高木神 上田 正昭

神武紀の史料性性格 横田 健一

聖武天皇の遷都—陰陽道との関係— 大畑 正一

国の等級について—『続日本紀』宝龜 六年三月乙未条をめぐって— 野田 嶺志

和泉地方の氏族分布に関する予備的考察 吉田 晶

最澄と空海の往復書簡について 秋宗 康子

俘囚の兵士 井上 満郎

古代における山中地獄の思想 高瀬 重雄

近江国愛智郡司依智秦公氏について 平岡 定海

九世紀における郡司制展開の意義—覚え書として— 佐藤 宗諱

延喜の奴婢解放令 阿部 猛

官省符と基準国図—延喜莊園整理令の側面— 丸山 幸彦

高陽院十斎講について 桜井徳太郎

庶民的法華講会について—平安時代法

華仏教史の一齣——高木 豊

藤原隆信について 石田 善人

日宋交渉の歴史的意義 三浦 圭一

板碑における供養について 鶴岡 静夫

九州の小地頭制とその所領——地頭(職)と御家人の区別に関連して——

工藤 敬一

中世水田の経営形態——作半を中心として——

泉谷 康夫

東大寺大仏殿常灯料田畠記録をめぐって

熱田 公

播磨国矢野庄の条里について 上島 有

卜部兼方自筆本日本書紀神代卷について

赤松 俊秀

長慶天皇についての研究 佐藤 利夫

石見国益田郷の構造について 国守 進

北畠満雅の蜂起と多気 松山 宏

赤穴氏について——惣領佐波氏との関係を中心に——

藤岡 大拙

建武以来追加の成立 上横手雅敬

徳政一揆の背景——天文十五年を中心として——

脇田 晴子

戦国大名領下の荘園所領——遠江国浜名

神戸大福寺—— 大山 喬平

畿内村落と国人層——和泉国を中心に——

能登中居の鋳物師について 田端 泰子

織田政権下の惣について 脇田 修

織豊期の畿内代官——御牧勘兵衛を中心として—— 朝尾 直弘

太閤検地帳よりみた新田開発農民——撰津国東天川村検地帳の検討——

松尾 寿

石高決定に関する一考察 宮川 満

慶長初年の江戸大名邸地 水江 漣子

羽州村山地方における近世初頭の検地について 伊豆田忠悦

島原・天草の乱について——通説の修正

二、三—— 林屋辰三郎

土佐藩における軍役にかわる材木献上について 石躍 胤央

改作仕法と農養生産 高沢 裕一

民間寺伝における中興開山 竹田 聰洲

郷士の成立とその展開——三・遠・信国境地帯における——

若林 淳之

肥後藩における郷士制度 原口 宗久

徂徠の四書注解と朱子学批判 今中 寛司

江戸幕府の「飛騨一國御林山」について 日置弥三郎

いわゆる加賀騒動の史的背景——享保・

寛保期における加賀藩の財政政策—— 若林喜三郎

司馬江漢の思想 埜上 衛

幕末における江戸幕府権力の性格 藤野 保

幕末期畿内における石代納——三分一直段平均化をめぐって—— 酒井 一

近世後期の農家家計——撰津国武庫郡上瓦林村岡本家の場合—— 宮下美智子

義民伝承形成の歴史的条件 横山十四男

農村における寺子屋の一性格とその社会的経済的背景 利根啓三郎

慶応二年の佐藤清臣——「伊那の松風」の紹介をかえて—— 芳賀 登

エル・エル・ゼーンスについて 杉井 六郎

旧堺県の郷学校についての一考察 福島 雅藏

北海道開拓史における土族移民の問題 榎本 守恵

明治初期における十州塩田休浜同盟について 河手 龍海

福沢諭吉・一八九一年「貧富論」の転換 ひろた・まさき

一八九六年の營業税反対運動 江口 圭一

第一次桂内閣の初政と政友会 山本 四郎
木下尚江・明治三十九年夏——社会主義

運動離脱の論理と心理——後神 俊文
犬養毅と孫文の革命 彭 澤周

憲政会論——その財政・経済政策を中心
に——里上 龍平

日本帝国主義と朝鮮の社会的変革

芝原 拓自

(菊判一、一五〇頁 昭和四五年二月小
葉田淳教授退官記念事業会刊 京都大学文学
部内説史会発売 定価五〇〇〇円)

(広川禎秀)

R・W・VAN・アルスタイン
高橋章・長田豊臣・山本幹雄訳

アメリカ帝国の興隆

本書は、一九六〇年に出版されて以来、
アメリカ外交研究者のみならず、全ての
アメリカ史研究者の間に大きな波紋を投げ
かけ、さまざまな方向へのアメリカ史研究
の発展を啓発してきた、示唆的で魅力に富
む著作である。

本書の企図は、アメリカ史を「帝国」の

歴史として、すなわち一貫した膨脹主義国
家の歴史として把握することにある。筆者
のアルスタイン教授は、これを、植民地時
代から、F・D・ローズヴェルト政権に至
るまでのアメリカ史を辿りつつ試みられて
いる。

本書が、アメリカ史研究者間に大きな波
紋を投じたのは、何よりも、アメリカ史像
を、従来の民主主義国家の歴史としてでは
なく、侵略的「帝国」の歴史として再構築
した点にあらう。この点で、本書は、「ア
メリカ＝民主主義国家」の神話を打破し、
より冷静で客観的なアメリカ評価へと、研
究者のみならず、世人の眼をも開いてくれ
たともいえる。

このような新たなアメリカ史像は、とり
わけ、いわゆるニュー・レフト系のアメリ
カ史研究者によって受け容れられ、すでに
具体的成果をも生みつつある。アメリカ帝
国主義成立に関する、近年最大の業績であ
る、W. LaFeber, *The New Empire, 1863,
Cornell Univ. Press* などは、その典型例
である。

その他、本書が示唆的であるのは、以下
のような点である。アメリカの膨脹との関

連におけるカナダ史への注意の喚起。アメ
リカの大陸内膨脹の中でのインディアン
の地位についての言及。モンロー主義につ
いての積極的解釈。現代アメリカ外交にお
ける、感情主義、倫理主義の存在の指摘。一
九世紀末アメリカの海外膨脹を、F・ビー
マイスのように「断絶」としてではなく、
史的連続性において捉えていること、など。

このような多くのメリットにもかかわらず、
本書には、疑問の点も多々ある。とり
わけ、「帝国」という言葉を使用せねばな
らぬ必然性が不明確である。本書を一読す
れば、「帝国」という用語が、単に膨脹主
義国家を意味しているにすぎぬことは明白
である。それゆえ、「帝国」の歴史として
捉えられた彼のアメリカ史は、平板な膨脹
主義国家としての歴史でしかありえない。
彼の、アメリカ現代史への論究が弱いのも、
この点の制約をうけているものと思われる。
膨脹主義国家(「帝国」)アメリカの内部構
造の変化と、それに応じた、膨脹の質の変
化にこそ一層の注意が向けられるべきでは
なからうか。

いずれにせよ、新たなアメリカ史像を提
起することによって、アメリカ史研究に輝